
わたくし、十二歳で王妃になりました。

碧

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わたくし、十一歳で王妃になりました。

【著者名】

Z5268Z

【作者名】

碧

【あらすじ】

十一歳で王妃になったわたくしのひととき

初めて夫になる人と顔を合わせた時、その人は王座から飛び上がりに立ち上がりフルフルと震える指を頭を下げるわたくしに向けられました。あら、人を指差すなど無礼ですわ。要、注意事項ですね。心のメモにそう書き込むとわたくしはじっくりと王を観察します。

その驚愕に染まつた顔はとてもじゃないが一国の国主を勤める男には見えませんわ。

やれやれ、内乱で疲弊しきつたこの国を支えなければならない王がこんなに分かりやすく動搖を表にだしてどうするのですか。一枚岩とは言いがたい内政と虎視眈々と狙う諸外国相手に付け込まれますよ。まつたく。

これはしつかりとわたくしが手綱を握らなければ決意を新たにしたわたくしに王が始めて発した言葉は。

「この子が妻だと？ 王妃だと？ どう見ても十の子供ではないか！ こんな子供を妻になどそなたらは何を考えている…！」

で、「ぞいました。

……大変失礼ですわ。わたくしこれでも十一歳。立派な”淑女”を自認しておりますのに。

だからほら、失礼なことを言われても笑つて流せますのよ？ 何せ、

”大人”で”淑女”ですから。

なのでにつこり笑つて流して見せたのに何故だか王は顔を引きつら

せ、この婚姻をわたくしに持ちかけてきた王にしてみれば「諸悪の根源」たる宰相様が目を細めた。宰相さまがあんな風に田を細められるときって決まって爆笑しているときですのよね。

いえ、何も知らない人がみたらしらつとした顔で王の側に立つて、威厳溢れる宰相にしか見えませんけど。さすがは経験と腹黒の差。若造新王と老獴宰相の対比がすごいですわ。

つらつらそんなことを考えている間にも王が隣にいる宰相に掴みかからんばかりに捲くし立て、それを喰えない宰相が喰えない笑みで軽く流していらっしゃいました。

謁見の間に響き渡るほど絶叫を上げる王の年は二十一歳。その妻にして王妃に内定したわたくしは十一歳。年の差十歳の夫婦のなんとも賑やかな初顔合わせがありました。

嫌だ。無理だ。正気に返れ！…と駄々をこねる王をよそに日々は流れ、婚姻はつつがなく終えました。

ええ、式当日にも関わらず懲りずに逃げ出そうとした王をド突いて、引きずりながら祭壇に向かつたのもいい思いですわね。

結婚してからはバリバリに働きましたわよ？元々わたくしは王の伴侶というよりかは補佐役として選ばれたのですから。己で言うのもなんですがわたくし、とっても有能です。

貧乏貴族でした実家を纏め上げ、微々たる利益しか上がらなかつた領地から莫大な利益を上げるぐらいには経営センスに恵まれてきました。お父様のお手伝いと趣味で経営と領地運営と政治についても学びましたし、実地にて経験も積ましていただきました。

わたくしのように幼き頃よりすば抜けた才能を現す子供は「祝福」と呼ばれ、極めて珍しい存在なのだそうですわ。ま、わたくしには

関係ありませんけど。だってわたくしの示した実績の数々は生まれ持った才覚を上手く伸ばし、努力を怠らなかつたわたくし自身の功績であり、「祝福」だからできたことではありませんですもの。

宰相に目をつけられ、王妃を打診され、了承しそしてわたくしは王妃としてこの国の政治に関わることになりました。

わたくしがお飾りであること、離縁は出来ぬが本当に愛する人を見つけたら一切口を出さないこと。等等契約結婚であることを挙式後説明したら「なんで俺に黙つていた………」と怒鳴られました。

理由？簡単ですわ。言つたら最後、王は絶対にこの結婚に賛成しなかつたでしょ？

子供わたくしの未来を限定してしまつことに罪悪感を覚える王の姿がありありと思い浮かびますわ。

ついでにもう一つの王の懸念事項「幼女趣味だと誤解されたどうじよ」については無用の心配ですわ。だって挙式前最中後全てにおいて王は全力で結婚から逃げようとしていらっしゃいましたから他の人々はきっと宰相さま辺りに無理やり強要させられた結婚なんだなと思うことでしょう。

ま、粗つてたんですけどね。

そうして日々が過ぎていきました。王の補佐をしつつ逃げ出そうとする王を捕獲、途中で王が農作業に目覚め畑に逃げ出したのでそれを阻止するために日夜鍬を担ぐ王を追いかけては執務室に連れ戻す日々。

「じえにふあーがあいーるがみるるがああああ俺の世話を待つて
いるんだあああああ

「はいはいはい。キュウリもトマトもイチゴも世話は他の人に頼みましたからね。王は王にしかできないこと（仕事）をしまようね」

「そう思ひのでしたら仕事を濫めないでくださいませ」

結婚してから飽きるほど繰り返された応酬に慣れた手つきで暴れる王を引きずるわたくし。ここに嫁にきてから確実に筋力と脚力と俊敏力が上がりましたわ。

ぱくといと執務室に王を放り込む。てきぱきと書類を用意して王を椅子に座らせ、その前に書類を差し出す。

「や、お仕事ですわよ」

「だ...」
だらだら

「あらあら、
今夜は衛夜したいのですか？」

こんなやり取りを繰り返していたわたくし達でしたか最近、王の様子がおかしいのです。

人の顔をじっと見つめている。が、視線を向ければさつと目を逸らす。話をする時目をあわさない。

なぜか、頬を赤らめている。突然、そ、そんななんじやないからな！」と言い出しながら走り出す。

奇行にもほどがありますわ。

一体、王に何が起きたのでしょうか?

何か悩みがあるのかと心配になつたわたくしが王の奇行を事細かに宰相様にお伝えしたところ。

「…………」

見たこともないほど目を細められておられました。…………や
んな爆笑所があつたのでしよう? わたくしは首を傾げるしかありま
せんでしたわ。

王の奇行の意味をわたくしが知るのはその一年後。わたくしの十八
歳の誕生日にバラの花束ならぬ王の作り出した新種の野菜を籠一杯
に差し出され、愛を告げられた時であります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5268z/>

わたくし、十二歳で王妃になりました。

2011年12月17日21時48分発行